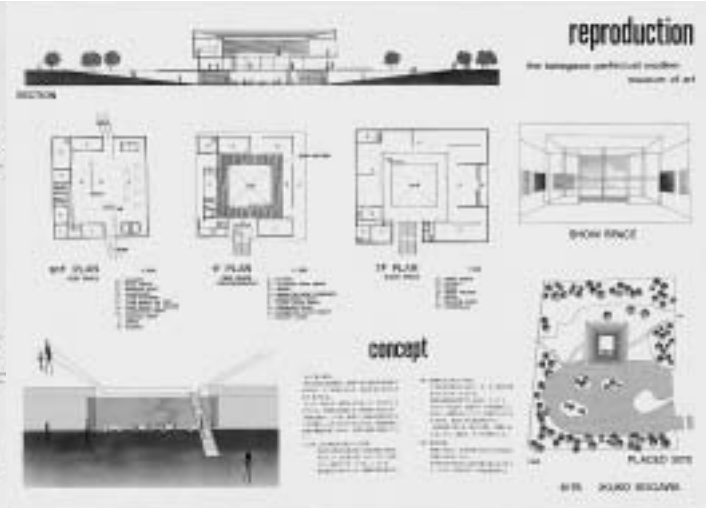
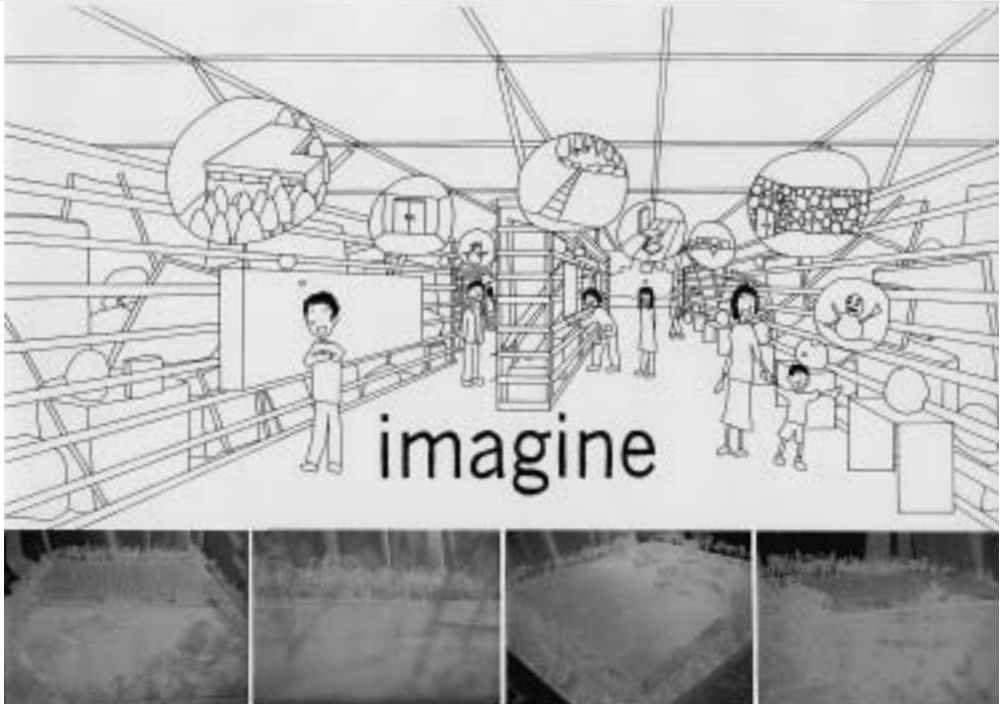
奥津　京子

曽川　郁子





藤本　常雄

設計演習Ⅰ

共通テーマ
モダニズム建築の評価と再生

第１課題
神奈川県立近代美術館

第２課題
神奈川県立音楽堂

３年２組

担当：
高橋　寛

【第１課題】

奥津　京子

評価の高い近代建築を再生するにあたり、「残したいもの」を大切にすることを基本とした（外観や半屋外空間の心地良さなど）。その上で、現代美術館にして、自由な鑑賞形態を取り入れ、また、建築自体が１つのArtになるように、普段味わえない空間の演出をテーマとして盛り込んだ。

曽川　郁子

神奈川県立近代美術館は特徴のある個性的な建物であるのに、ここを訪れる人は、展示を見に来る人だけのようである。そこで、誰もが気軽に立ち寄って、楽しむことができる、公園的な感覚をもつ美術館へ再生する。建物自体が一つの彫刻で、敷地が展示室のような印象をよりきわだたせるために、新館は壊す。新館の機能を補うために、空間を地下へ展開していく。

FREE SPACE
B１F 主に休憩を目的とした空間
１F　地域の人に役立つ空間
SHOW SPACE
２F　展示空間

藤本　常雄

敷地内の建築を全て部材にバラし、それを木製のかごの壁に入れ、新たに美術館を計画した。現在、坂倉の目指したモダニズムはすでに薄れ、多くの人は何も感じないまま過ごしている。この提案では壁の中に入った**もの**に刻まれた時間や時代性、姿・形が人に想像のきっかけを与え、一人一人に坂倉のモダニズムや一つの建築の歩みを感じさせる。また、**もの**の持つ力に包まれた空間は、アートをより楽しいものにするだろう。

【第２課題】

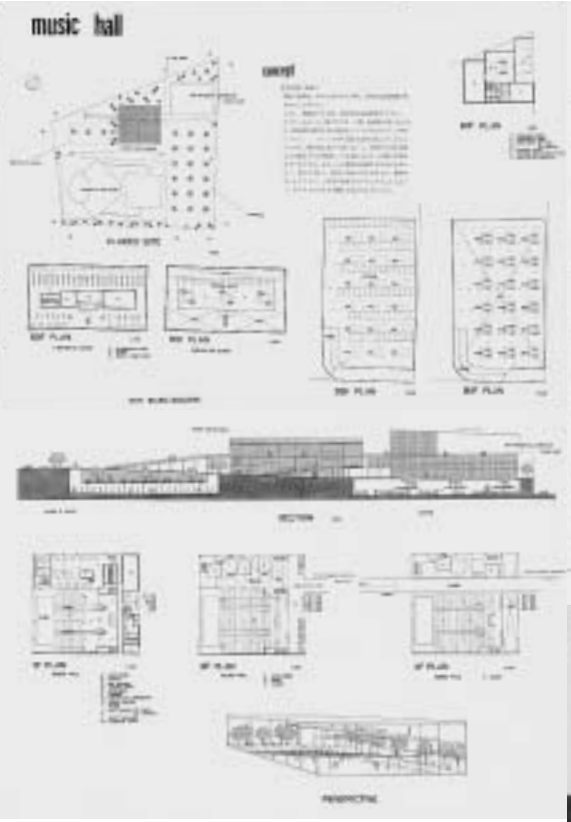
曽川　郁子

現存の建物で私の目をひいたのは、音楽堂と図書館を結ぶブリッジだった。
しかし、機能面から見て両者を結ぶ必要性は薄い。そこで、小ホール・貸しスタジオ・CD、楽譜などの貸し出しを行う図書館の機能を持つ建物を、ブリッジを中心として再生していく。空間内は、様々なレベルをつくり、人の流れをデザインした。そして、それを視覚的にとらえられるように、内部の壁は、ほぼガラス素材にした。

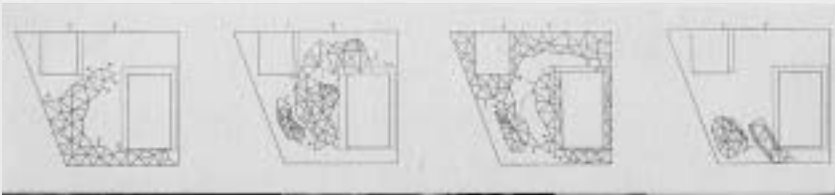
土屋　早苗

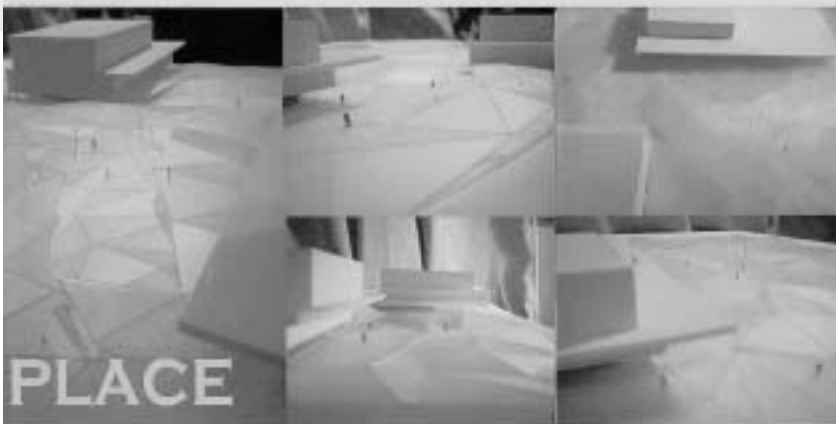
今、この街でくつろぎの空間を持っている人はどれだけいるだろうか。日常と異なる時間を過ごす空間が、もっとあってもいいのではないか。空へと続く空間、そして、音楽を通し、それによりただ精神を癒す場所。ごちゃごちゃした街の中で、他人に気兼ねなくゆったりできる、自分に返ることができる、そん

曽川　郁子



土屋　早苗





藤本　常雄

な空間を提案する。

藤本　常雄

前川の建築のもつ場への弱さを感じるぼくは、残された２つのモダニズムを結ぶ方法として、大地を建築化し、２つの建築だけがもつ場というものをつくった。そして意識的な場と建築の分裂をはかり、建築そのもののもつ力や大地のもつ魅力を素直に人々に感じてほしい。

指導＝高橋　寛

初期の日本のモダニズム建築をいかに現代に再生させるかを、第一課題では坂倉準三設計の神奈川県立近代美術館を、第二課題では前川國男設計の神奈川県立音楽堂を例としてみんなに考えてもらった。モダニズム建築の再生はまだあまり例がなく、指導する私としても、みんなと話し合いながら進めることになった。結果としては、主題から逸脱してしまった部分も大きいが、ここでは、現存する建築と場所を通して各自が考えた案を紹介する。

第一課題、藤本君は「再生することは、オリジナルの建築を全く変えず、何も加えないことでしか実現できない」という観点から、そのままこの建築を現代に再生することの不可能なことにいたり、そこから、建築の形態ではなくその構成する素材がもつ記憶の喚起力に注目して、いったん建物を壊しその素材をパッケージした壁面ユニットにより新たに構築されたシンプルな建築を提案した。曽川さんはこの建築の中庭空間に注目し、その求心性と開放性をより顕在化させる構成に主動線をつくりかえながら、地下に新たな開放空間を設けて機能的な不足を補いつつ、建築全体を公園の中の休憩スペース的なものにつくり換えている。奥津さんは、近代美術館を今までの均質で無性格の箱とするのではなく、「いくつかの特徴的な空間に、その場にふさわしい作品を展示したい」という考えから、この建築がもっている特徴的な要素である、構造、立地、中庭などを生かしながら全体をつくり換えている。

第二課題では、敷地全体がある規模をもち、敷地内に同じ前川設計の青少年センターがあるために、全員がランドスケープ的な視点からアプローチすることになったことは興味深かった。藤本君は主に地下部分に現在の音楽堂をサポートする施設をつくり込みながら、敷地全体を既存の建物を含めて有機的に連続させるために建築化している。曽川さんは駐車場を地下に入れ込む際に、駐車場から地上へのアプローチ部分を樹木とボイドの組み合わせという空間ユニット的なものとし、それを一気に敷地全体に拡大し統合している。新しい建築は音楽堂に特徴的なテラスを延長したアプローチ上にガラスで囲まれた小ホール、その先には地下空間としての小ライブラリーをつくり、既存の建物との関係を計画している。土屋さんは隣接する青少年センターを取り壊し、その事務的な機能を残して青少年のための小さな礼拝堂（ここは小ホールを兼ねている）を敷地北側に音楽堂と並んで計画した。さらに敷地全体を連続した短冊状の壁で囲い込み、その内側に芝生だけの豊かなボイドスペースをつくりあげている。

それぞれは直接的には再生の思想、技術、意匠の提案とは若干ずれてしまったが、各自が真摯に対応し、いくつかの現代的な建築の問題にアプローチできたのではないかと考えている。